

映画『アフリカ、お前をむしりとる』をめぐって —第36回外国語教育研究会報告

土 屋 昌 明 整理

はじめに

本学 LL 研究室主催により、平成 24 (2012) 年 12 月 1 日 (土) 15 時から本学神田キャンパス 2 号館地下 1F 視聴覚教室において、第 36 回外国語教育研究会「フランス語を脱植民地化から考える—映画『アフリカ、お前をむしりとる』の上映と討論」が開催された。

本研究会の趣旨はつぎのようであった。外国語の学習はコミュニケーションやビジネスのスキルを習得することだと言われがちであるが、それだけではない。外国語学習を文化や社会の観点から見直すことによって、外国語の学習ないし教育という行為そのものが持っている意味を考えることができる。中でも、外国語教育・学習と権力の問題が重要ではなからうか。そこで、植民地における言語の問題にも触れているジャン＝マリ・テノ (Jean-Marie Teno) 監督『アフリカ、お前をむしりとる』(英語: *Africa, I Am Going to Fleece You*, フランス語: *Afrique, je te plumerai*, 1992 年制作, 特定非営利活動法人 山形国際ドキュメンタリー映画祭作品提供) を見て、言葉と権力の関係を考えなおしてみようとした。このドキュメンタリーの舞台はカメルーンであるが、カメルーンではフランス語を使用している。かつてフランスの植民地であったカメルーンというアフリカの国にとって、フランス語を学ぶとはどういうことなのかを考えてみようとした。

そこで当日の研究会では、前半に映画の上映、後半にそれをめぐって討論をおこなった。本稿は、その討論の録音に整理を加えた記録である(記録に

残すことを希望しなかった参加者の発言は採っていない)。主催者側の発言者は、寺尾格（室長，経済学部教授，ドイツ語担当）・下澤和義（室員，商学部教授，フランス語担当）・土屋昌明（室員，経済学部教授，中国語担当）である。末尾に，下澤室員が用意した当日の討論用資料を附録させてある。

寺尾 今日はお忙しいところ，どうもありがとうございました。LL室長の寺尾です。ドイツ語を教えています，ドイツ演劇の専門です。今日の映画を見て，ドイツもアフリカでいかに悪いことをしているかわかりました（笑）。

LL研究室という，いまどきLLという名前はえらい古風なんですけれども，通常「外国語教育研究会」というのは，外国語を教えるノウハウの研究というのが多いです。しかし，やはり外国語教育というの，単なるノウハウで終わらせるべきではありません。ノウハウがいけないのではなく，外国語を勉強する際には外国語を学ぶ背景をノウハウとともに，勉強するべきでありますし，そのような意志がなければ，権力のお先棒を担ぐことになってしまうのではないかと。自戒を込めて，通常の「外国語教育研究会」的なものと同時に，映画を年に2・3回上映しています。来年度は予算を倍増して，もう少し回数を増やそうと思っています。

趣旨としては，商業主義的な映画はハリウッド等のもので見られますので，大学でなければ見られないような映画，特に山形国際ドキュメンタリー祭はいいものを出しています。そのような映画を見る機会を作るといえるのは，大学の使命だと思います。あるいは，外国語を勉強するということの持つ意味の自覚がなければ，外国語の学習は単なるお勉強に墮するのではないかと。

また来年以降も，この手のコアなものをいくつか用意しています。もちろん映画を見るだけでなく，ディスカッション等をやるのは大切だと思います。今回ははじめてなのですが，アフタートーク的なものを録音して，そういうことをいうとプレッシャーをかけてしまうかもしれませんが，それを文字に

起こして、嫌でない方の発言は『外国語教育論集』に報告として載せられれば良いかなと思っています。よろしくお願いします。

土屋 司会の土屋です。私は中国語を担当していて、専攻は中国の歴史なので、今回の映画とは全く関係ない分野です。だからにわか勉強で作ったのですが、いくつか情報として提供できるものを資料にしましたので、それにそって簡単に考えていきたいと思います。

まず、ドキュメンタリーとしてこの映画は非常によくできています。構成に注意すると、ドキュメンタリーでありながら、インタビューや記録映像のシーンだけではなく、演出したシーンもたくさんあります。印象的なのは、画面が白黒になっているところがありますが、あれは白黒に作ってあるもので、そこはドラマ仕立てになっています。そのシーンでは子供が主人公です。そのさしこみのシーンが、話のストーリーに展開をつけているわけです。例えば、植民地の白人がカメルーン人に連れられてある人の家に押し入り、ベッドの下に隠れていた男を見つけて連行する、というシーンがあって、急な展開で驚かされます。あのシーンは、もしかしたら何かのドラマ映画の引用かもしれませんが、おそらくさしこみのために作ったものでしょう。そのようなシーンによって、展開に変化が生じて面白く感じるのです。また、インタビューのシーンにも、私たちが考えるような、話者が座って淡々と話すという構図ではなく、話者に演出を依頼している状況が見て取れます。例えば、図書館の館長にインタビューをするシーンで、図書館の館長が右側上から階段を降りてきて、画面左側にインタビューする女性が立って待っており、それをカメラが手前から撮っています。このため、このシーンはインタビューでありながら動きが生じて興味深いです。そのように、右上からこっちに降りてくるという演出がなければ、ああいう風にはなりませんね。

そしてこの映画は、物が完成するまでのプロセスをとる、というドキュメンタリーの基本的な手法も入っています。印刷物がどのように完成するかというのを非常に綺麗に撮っていますね。そのシーンで、輪転機の下からライ

トを当てて、機械がどういう風になっているかを劇的に見せていて、あのあたりのドキュメンタリーの手法、そうしたシーンがコンテキストの中で効果的になるように考えられていて、非常に面白いと思いました。

それから、この映画は音に対する感覚がすごい。例えば、漫画に出てくる、白人が黒人を殴る「ボン」という音が至る所に出てきます。それが一番印象的なシーンは、記録映像に出てきた、実際に植民地独立後の警察がデモの人々を殴ったりする場面に、同じ「ボン」という音が入ったり、乱開発で大きな木を切り倒す記録映像のところにも同じように「ボン」という音が入ったりして、その音がリフレインされています。また、音楽もとてもすばらしい。まず映画のタイトル「アフリカ、お前をむしりとる」がフランスの童謡「Alouette, gentille alouette (ヒバリさん、かわいいヒバリさん)」の歌詞「Alouette, je te plumerai (ひばりさん、きみからむしり取りましょう)」から採られており、その曲が映画の中で歌われて、植民地を搾取するフランスの暴力を風刺するように使われています。音楽で極めつけは、最後に登場するライブハウスのバンドですね。あのバンドはああいうカメルーンの厳しい現実を皮肉るような曲をわざわざ作ったのでしょうかね。曲の内容とドキュメンタリーの作り方が非常にうまく相即している。つまり、最後のバンドのシーンは、映画自身に対する自己言及になっているのです。おまけに、大統領の演説へのこの監督の公開質問状と、このバンドの歌手が大統領の記者会見のまねをするのが対応しているのにも笑われます。

このようにいくつか気がついた点を挙げただけでも、この映画が非常によくできていることがわかるように思います。

この監督は1954年生まれで、今まで少なからぬ映画を作っています。多くの作品がDVDで販売されているようですが、日本国内で流通販売されているものは一つもないようです。注意しておかなければならないのは、この映画が1992年の前後に作成されていることです。その段階のカメルーンは、1960年代に植民地からの独立を果たして、1980年代に経済が破綻して、それを80年代末の冷戦の終結が加速させた、という状況にある段階です。90

年代からのカメルーンの様子は、この映画に反映されていないのです。ここを誤解しないようにしたいです。

その後の状況について、中国を研究しているという私の視点も交えて簡単に見ておきましょう。一つは世界銀行やIMF等が世界経済を牛耳っているという動き、要するにグローバリゼーションの動きが非常に強くなって、融資の条件として民主化を発展途上国に課したわけです。つまり、独裁主義ではなく経済の自由化と市場主義を導入しろということです。90年代からカメルーンもその流れに入りました。援助と引き替えに西洋型の民主化を進めなければならない。これが、植民地時代の生活やその後の独裁的な政治によって形成された制度や習慣と齟齬をおこすだけでなく、国内の権力が保持する権益と矛盾する場合がおこり、社会の混乱を惹起する。この状況の反作用もあって、21世紀に入ると、中国の援助が非常に強くアフリカで受け入れられるようになります。これはグローバリゼーションとは少し違った視点です。中国は西洋型の民主化を現地に求めない。経済の方だけでいい、独裁政治をやるならやってください、という視点なのです。つまり、現地の政治家や有力者からすると、受け入れやすいやり方を中国は導入してくる、という動きがあります。私はカメルーン現地のことを知りませんが、90年代には言わばアメリカ式の自己責任というやり方が進展したようです。国営企業を民営化する、するとリストラをしなければならず、失業者が増大し、社会不安がおこる。政府支出を削減すると、教育や医療にお金をかけなくなり、社会の人的な基礎がだめになる。インフレと国内の経済格差の拡大が起こって、低所得者層が打撃を受ける。こういう動向だったのだと思われます。だから、この映画で見た社会状況はすでに相当悪いですが、この映画のあと、90年代にはもっと悪くなったのだと思います。そこへ、今言ったように、中国の台頭が起こってくる。こういう状況がこの映画以降から最近までの流れではないかなと私は想像しています。

話を戻しまして、この映画の基調にある歴史的な問題意識については、画面から見て取れたと思います。この監督は、言語の問題に非常に関心がある

ようです。その基本には、アフリカ社会を救済・民主化させようという西洋側の無意識の姿勢が、植民地時代からずっと続いていたということがあるようです。監督はそれを強調したいのだと思われます。つまり、言語の問題はアフリカの西欧的な文明化という植民地主義の問題でもあるのです。これに気がつくと、この映画以前の80年代に、アフリカでは主要言語の問題がクローズアップされていたことを想起させられます。

例えば、ケニアのグギ・ワ・ジオンゴ (Ngũgĩ wa Thiong'o, 1938 ~) という作家などは、それまで小説を英語で書いていたのですが、1977年から英語で書くのをやめてキクユ語 (Gĩkũyũ) という自分たちの言葉で書くということを宣言し実行しています。言語というのは、人間の思考活動において重要な役割を持っているのに、植民地主義によって経済や社会だけでなく、言語も収奪されてしまった。だから自分たちの言語を取り戻さなければならない。このような動向が、この映画制作の以前にあって、それをこの映画は承けているのだと思われるのです。グギ・ワ・ジオンゴ氏は「精神の非植民地化」ということを言っていますが、似たような言葉がこの映画の中のナレーションでも使われています。

この映画ではフランス語ですが、アフリカの東側では英語が宗主国の公用語でした。英語に関して言うと、私たちもそうなのですが、英語は国際語であり、だから便利なので使う、とそういう風に考えています。英語は単なるコミュニケーションの手段に過ぎないと。ところが、この映画を見ると（この映画ではフランス語ですが）、英語やフランス語をそのように単なるコミュニケーションの手段としてのみ考えていてよいのか、という問題を思わせられます。つまり、英語やフランス語などの大国の言語を学習することは、そこに文化的な搾取の問題が潜んでいるということです。私たちの外国語学習において、こういう問題を前面に押し出すことはもちろんできませんが、そういう問題に対する考慮をしないで、当該言語をただ道具として教えたり学習したりするだけでよいのか、私はちょっと疑問に思います。

と言うのは、私自身の話に戻って、私は中国語を教えています、中国語

というのは本学でもどこの大学でも、すべて北京語のことです。北京語は共通語とされていますが、その文字は中国共産党が作った簡体字を使っています。つまり、中国国内でもアフリカと似た現象が起きていて、チベットやウイグルの人たちに対しても北京語を教えなければいけない、彼らも北京語を使えなければいけない。この映画とそっくりなんですけど、北京語ができなければ大学にも入れないし就職もできない。逆に、北京語を使ってチベット人ともウイグル人とも話ができるという風になると、その方が便利で、このコミュニケーションの道具としての英語とか、この映画のなかのフランス語とちょうど同じような感じになります。それを私は、英語やフランス語のときは、それは文化的な搾取が潜んでいるとか考えているのに、北京語のときは何も考えずに北京語だけを勉強して北京語だけを教える、他の言葉は関係ありません、とそれでいいのだろうか。こんなことを自分で考えています。つまり、中国語の分野においても、もう少し他の考え方もできるんじゃないかな、と思うわけです。

そんな考え方をしますと、この映画も私にとっては身につまされる。それに、アフリカのことは知らなかったのですが、この映画を見てアフリカのことが少しわかったような気がします。アフリカとフランス、カメルーンとフランスの政治的な関係だけでなく、言語の問題として考えると、これはいろいろと示唆的な映画だと思いました。

あと、カメルーンの彼らが、どういう大衆文化で育ってきたか、それが私たちとどう違うかというあたりもわかって、興味深かったですね。例えば、さっき「ボン」という音のことで言った漫画にアキム (Akim) というジャングルの若者のことが出てきます。これはドイツのハンスルーディ・ヴェッシャー (Hansrudi Wäscher) のコミックのキャラクターです。また監督が映画をテレビ会社に売り込みに行くと、テレビ会社の重役らしき人物が、『ダラス』みたいな売れる映画なら買ってやるよと答えますが、この『ダラス (Dallas)』は、アメリカの CBS で 1978 年から 1991 年まで放送されたテレビドラマで、アメリカで高い視聴率をとったものです。

また、そうした漫画や映像などを見て、カメルーンの彼らがどう感じていたか赤裸々に描かれていました。子供のときにインドの映画を見て、将来は白人になって、そしてインドへ行って、インドの美人と結婚するのが夢だと言っていました。あれなんかも、私からするとなんでインドが出てくるのかな、と思ってびっくりしたのですが、考えてみるとインドっていうのは映画をすごくたくさん作っていて、それは欧米のものにくらべて安いですから、アフリカ等で輸入していたわけですね。それに、インド人がイギリスの植民地支配で、現地のイギリス人のかわりに支配者層にいたということが関係しているのだと思います。それにしても、カメルーン人がフランス語を学び、フランス文化になじむことによってまず白人になり、白人が持っているオリエンタリズムの嗜好も自分のものにして、インド女性を妻にしようと思う、という構図がすごいですね。

このように考えてみると、この映画はいろいろな点で勉強になるなと思いました。話が長くなるので、ここで終わりにします。今の話なども踏まえながら、感想などをお話ししていただけないでしょうか。

中村 よろしいでしょうか。中村隆之と申します。現在、大学の非常勤講師で、フランス領カリブ海の文学を勉強しています。

本日の映画からは、非常にさまざまなことを考えさせられ、本当に勉強になりました。まずはこの映画上映の機会に感謝申し上げます。そのうえで感想めいたこととお話します。

いろいろと考えさせられたのですが、土屋先生がご用意くださったこの資料に則しながら思うところを述べますと、この映画から一番痛烈なメッセージとして受け取ったのは、同化主義が植民地支配においていかに貫徹してきたのかということ、僕の感想はこの点に尽きます。と言いますのも、カリブ海もまったく同じであるのです。カリブ海には、フランス領の島が二つあり（マルティニクとグアドループ）、南米にギユイヤヌ（仏領ギアナ）と呼ばれる地域があるのですが、それらの地域は二度目の世界戦争終結後、

ただちにフランスの海外県になります。「海外県」という言葉も字幕で出てきていましたけれども、そういう地域なのです。まさしく苦境の中で労働組合を作って賃金格差をなくしていこう、とにかくこの苦しい労働条件からなんとか抜け出そうというときに、フランスの県になることを求めたわけです。1945年前後のことで、政治的独立を求める意識がまだ育っていない時代でした。ですから、まず社会の不平等をなくし、いかに宗主国に自分たちの生活を近付けるのか、というのが政治家たちの取った政策の方向性でした。こうした、宗主国に同化しようという動きはフランス領カリブでは以前からありました。とりわけ19世紀からそうなのですが、もとを辿ればフランス革命以来ずっとそうです。フランスという国が市民は権利上みな平等だと言っているからでもあるのですが、フランスとの関係性がまさしくアフリカと同じなのです。アフリカでは、「アフリカの年」(1960年)に旧フランス領が一挙に十数カ国独立したと、輝かしい形で言われますが、まさにこの映画が描いているように、それ自体がある種の同化政策の一貫としてずっとなされてきた挙句、民族主義の立場にいた人たちは抹殺されてゆき、新しい独立した国でドゴールの承認を得る形で政治的な独立が演出されて、また新しい混乱にアフリカが直面していく。そういう事態が、やはり同化主義の大きな問題として出てきていると思います。

映画の中で描かれていたように、知識人はとにかく言葉を覚えて、まず最初はフランス語の文章を翻訳する、というようなことから始めます。「知識人」を指すのに「エヴォリュエ (évolué)」というフランス語が使われていたのが印象的です。あれはむしろ「開化民」という意味ですよ。フランスの文明に自ら同化し、知識を身につけてフランス人になっていく人たちを当時の言葉で「エヴォリュエ (évolué)」と言いました。要するに、英語のエヴォリューションですよ。

土屋 エヴォリューションですか。

中村 エヴォリューションです。エヴォリューションした者たちという言い方をしているのですけれど、フランス領の政治的・文化的なエリートたちが宗主国に留学してフランス的な感性を持ち帰って政治なり文化なりを作っていくというようなところもあるのです。このなかなか難しい問題を映画では批判的な視点で捉えていることがとても興味深く思いました。

もう一点、使用言語の問題なのですが、グギ・ワ・ジオンゴのお話が出てきましたけれども、一方でアフリカはよく言われることですが、いくつもの言葉をしゃべる人たちがたくさんおり、そういう時にどのような形で共通の言葉、全員のナショナル・ランゲージというものを作るのがずっと課題になってきているのではないかと想像しています。くわえて、やはり読者の問題ですよ。

グギ・ワ・ジオンゴはキクユ語で書く。宗主国の言語である英語と決別し、民衆のためにキクユ語で書く。その決意の背景には、やはりその言葉でないと土地の文化、文化のなかで培われた比喻など表現できないものがあること、そして、その言葉を常に文学的に強くしていくことによって、来るべき共通語としてのキクユ語を確立しようという文学的な野心がおそらくあったのであろうと思います。同じような形でいわゆるポストコロニアルな地域の人々というのはやはりそういうところでずっと闘ってきて、うまくいくこともあればうまくいかないこともある。

カリブ海の文脈では、クレオール語で書くという人たちがやはりいて、今もいるのですが、結局ほとんどうまくいっていないという状況があります。それをどのように考えるのかというのが個人的な関心としてあります。

土屋 この映画の場合は、言語の問題と「映画」ということも並行しているのだと思います。最後にも出てきましたが、彼は「映画は白人の魔法だ」と言っていて、監督自身が、自分がやっている方法も、結局はフランス語をしゃべっているのと同じ位相なんですね。だから、フランス語を使うのは否定しない。グギ・ワ・ジオンゴのような、旧宗主国の言語を使うのをやめて、つ

まり映画を撮るのをやめて、という戦略は採らないのでしょう。

吉田 私は中国語を教えているのですけれども、今回見せていただいた映画で2つだけ個人的にどうなのかなと思った点があります。ひとつは、今みたいにエリートとしてフランスの大学へ入って行った人たちが、本国に帰ってきた、あるいは帰ってこないかもしれないんですけど、帰ってきた人たちがまたエリートの層に入って行ったときに、どうしてその下層部の人たちに対して視線がいかないのかな、というところです。もうひとつは画像に「1885年だった」って書いてあったように思うのですけれども、王様が突如文字を考え出したというところに出てきた文字なんですけど、中国の女文字で非常に似たものを見た覚えがあります。それが似ているなと思ってびっくりしました。そのあと、500の文字だと覚えにくいからといって減らしましたね。その一部に蜘蛛が出ていた。蜘蛛のあとに表音文字にした。つまり、表意文字から音だけとって表意文字にした。それを使うことによって文が全部表現できるわけですね。あのあとどうなったかが気になります。この2点が私の感想です。

土屋 現在でも使っていると言っていましたね。だけど、実際どういう状況なのかはわかりません。

吉田 いま先生がおっしゃった同化政策ですけれども、これはアイヌの神謡集（ユーカラ）も琉球のオモロもほとんど結局そういうことではないでしょうか。

土屋 あれを見ると日本の同化政策にもそっくりですね。

秋枝・シュザンヌ フランス語のコミュニケーション会話をしております。印象として悲しいです。とても情けないというか、先生がおっしゃったよう

に、なぜ教えているのか、ということですね。言葉ができればできるほど差がひろがって、やはり差別の道具になっている。こちら側（教えている側）からすると、なんとも言えず悲しいです。特にこの映画では、書いた言葉、印刷とか文字が一番重要になると。私が知っている限りでは、アフリカでは文字を教える授業をいれたのは、エボリューションの道具になると考えたのですが、アフリカ人は文字よりも音、アフリカ人の言語のメッセージは文字よりも音で伝わっていました。西洋人の耳では聞き分けることができない音まで、彼らはもともと持っていました。それはきつとなくしたのでしょうかね。ですから文字を通して伝えることができるのとそうでないものがある。私はフランス語を文法じゃなくて、生きている言語、音としての大切さを学生たちに伝えています。フランス語では、もちろん文法はとても重要ですが、でも聞いて耳にいい印象を与えない文章は評価されません。その意味では、アフリカの方にとっても共通するのではないのでしょうか。でも、この映画ではその問題は出てきませんでした。

土屋 そうですね。この映画では、アフリカの無文字社会の話は少し背景として出てきただけで、全面的には取り上げられませんでした。カメルーンのおじいさんが一人で喋っているシーンの言葉は、フランス語ではなくて、何の言葉なのかわからないのですけれども、声調があるんですね。音の高さが上がったたり下がったりする。川田順造が詳しく述べていますが、言葉ではなくてドラミングによって歴史を伝えることができるという。ドラムの高低へと変わる音だけで、歴史の系譜の誰のことを言っているかわかるらしい。今おっしゃったように、アフリカ人が音を大切にするとところは問題になると思います。

専修大学二部法学部学生 貴重な映像を拝見させていただきありがとうございました。もともとアフリカのソマリアという国に興味があって、それで植民地関係の映像を今日拝見させていただいたのですけれども、映像のなかで

気になる、心に残ったワードで「子供達にとっては本が世界の窓」というのがありました。ただその後で出版の歴史を語る上で、カメルーンの出版の歴史というのは、フランスから入ってきて、そのあとで自分たちの本をどういう風に出版するかということを彼らは考えました。結局「本が世界の窓である」、本というのはフランスが見た黒人や白人という関係性でしかないのです、おそらく本のなかでは白人がヒーローで黒人が白人によって開化されていく。だからそれを見た黒人は自分が黒人という認識ではなく、ヒーローになりたいと思うので、白人にあこがれてしまう。そうすると自分のアイデンティティというのは育っていく段階で支離滅裂に崩壊してしまい、実際大人になったときに「自分は黒人なんだ」と感じ、劣等感が生まれてしまうのではないかと感じました。

それと植民地政策のひとつで、フランス政府側はフランス語を彼らに教えることで彼らの魂を解放していくという表現がありましたが、結局言語を押し付けることによって、もともと持っていた表現方法が押しえつけられてしまうので、それは解放ではなくむしろ抑圧となってしまったんじゃないかなと感じました。要は自分の言いたいことを口のところで違う言葉にして変えるということは、持っていた価値観はその段階で変わってしまうと思うので、そういう部分でフランス政府側が持っていた価値観は違うのではないかと感じながら拝見させていただきました。

フロア カリブ海の方でクレオール語を話す人は、家庭でもクレオール語なんですか？

中村 島によって違うのですけれども一番フランスと近い関係にあるマルチニック島では、エリートであればあるほど、フランス語を最初から学びます。ですから、クレオール語を母語としてしゃべることができないという人たちもいます。したがって、これはケースバイケースになってゆきます。

土屋 そうでしょうね。さっきの映像だと、小学校でもフランス語で勉強していましたね。それは完全に暗記する形のやり方で、先生がきれいなフランス語をしゃべって、それを生徒がリピートするという勉強でした。その教材の内容が、植民地時代の内容で、カカオを担ぐとか、ちょっとあれはホントかなあと思うんですけども。

中村 ああいう教育を本当に受けていた世代ですよ、監督は。

土屋 あの映像は本当ですかね？ 演出のようですが……

中村 僕は、あれはフラッシュバックで、自分の自伝的なものを語っている場面だと思いました。それが共通の経験として、あれぐらいの世代の人たちに似たようなものがあるのかなと感じました。

土屋 そうですよ。だから、この映画を撮った92年の段階であの教育をやっていたとはちょっと思えない。

中村 そうですね。ちょっと考えにくいですね。しかしある時期まではやっていたのではないのでしょうか。

下澤 少しデータを出しましょうか。背景の説明になるかどうかわかりませんが、お配りしたプリントの資料（附録下澤レジュメ）の左のページにデヴィッド・ハーモンによる調査の表がついています。Aの数字とBの数字はそれぞれ何を表しているのでしょうかというクイズなんです。

土屋 言語の数ですか？

下澤 そうです。言語の数はどちらだと思いますか？ その土地の言語の固

有の数。AかBのどちらかが言語の数です。Aがその土地で話されている95年の言語の数です。では、Bの数は何でしょう？ こちらは、言語学とは全く無関係に思える数なんです。ヒントを言いますと、ハーモンがこれを調べたのは全世界20カ国中の上位10カ国をリストに並べてみると、そのうちアンダーラインを引いている国は共通で、AにもBにもランクインしているのです。言い方を変えると、パプアニューギニアのようにAではトップで入っているとBのほうでも13位くらいでかなり上位にランクインしているんです。Bはまた別の判断基準なんです。上位25カ国中、対の空欄で16カ国は共通です。単純に割り算すると64パーセントが共通です。言語の数が多いとそのうちの6割強がBでも上位に来る。これは専門的な言い方をすると高等脊椎動物種の数なんです。トカゲやヤモリなどの脊椎のある動物です。今、エコロジーや自然環境の問題で動物保護が盛んに言われてますよね。実は、Aのほうは毎日ちょっとずつ減んでいて、そういうのを護るためにいま言語権という概念を作ろうという動きがありまして、ひとつ面白いデータであるなと思い出しました。今日出てきたカメルーンはAのほうでは7位に入ってますね。部族で話しているマイナー言語の数が201種類。で、Bの動物の方でも23番目にランクインしている。なるほど正の相関関係があるなということがわかってきます。

田中 文学部1年の田中です。まともなことを言えるか少し不安です。この映画を観に来ようと思ったのは、言語がなくなっていて、言語をなくされた人はどうなるんだろうということに興味があったからです。たとえば、日本人が言語をなくされて他の言語を強いられたら、自分たちが持っていた文化や概念はなくなってしまうのじゃないかな、と思って観に来ました。映画の感想としては、日本にも共通していることだと思うのですが、「白」はきれいで正義で「黒」はダメみたいな映画に出てきた価値観が、日本の今のアイドルや美人と呼ばれる人を見ても西洋寄りの顔ばかりという状況と似ているなと思いました。以前、友人に「骨格が黒人っぽいな」といったらすごく嫌

がられたのですが（笑）、そういう意識が植え付けられているのかなと思いました。今日の映画のカメルーンでも似たようなところがあって、それは危険なことだと感じました。フランス側が作ったと思われる映像で「アフリカの人に文化を教え込むんだ」という記述が出てて、あれはニュースか何かで流されたものなんでしょうか？　すごいことを言うなあ、傲慢なことを言うなあ、と思いました。そんなことを言っている時代があったんだと衝撃をうけました。

土屋　しかし、今も無意識のうちにそういうふうになっているんだよね。

寺尾　特に外国語をやっていると無意識のうちに傲慢になっていて、これは相当気をつけないと。

田中　それで、さきほどの話と似ているのですけれど、カメルーンの人たちが自分たちの言語、口頭だけの言語を奪われたら文化がなくなってしまう、なくなっているんですよ、実際に。それは悲しいことだなと思いました。あと今私自身、将来役に立つだろうからとりあえず英語を勉強しているんですけど、それもどうなのかなと思いました。以上です。

土屋　伝統文化をさぐってみたいというのも監督の一つのテーマなんだけど、実際に出てくる伝統文化はあんなものしかないというのは、むしろ逆説的な表現なのかなと感じました。寺尾さんはどうですか？

寺尾　では一言だけ。同化と独立化の問題について、ドイツの場合、言語とナショナリティがほとんど切り離せませんから、植民地の問題ではほとんど出てきませんが、特にユダヤの問題で、相当にシビアな議論が出てきています。特にユダヤ人における同化の問題というのは、ほとんど言語の問題としてあらわれてきているということだけを言っておきます。

下澤 少し追加をいたしますと、一番をご覧ください。これは、言語学者の田中克彦さんの論文からの抜粋なのですが、前半ではまさに同化政策のことが指摘されていますけれども、それは単に上から外圧で押しつけて可能になるのではなくて、実は民衆の方からも学びたい、もっと広い地平へ出ていきたい動きがあり両方がかみ合ってはじめて言語帝国主義が機能するだろう。こういう時に民衆を後押ししている企業や政治などそのレベルは様々ですが、我々言葉を教えている立場から言いますと言語学とか言語理論のセオリーの中には実は同化政策を含む理論があるんだと。その特徴を田中さんがポイントアウトしているので読みますね。

- (1) 世界の言語には未開のままにとどまった遅れた言語と進化した言語の違いがあるという主張。
- (2) 世界の主言語は多様な姿をとっていてもその根底においては普遍的であるという主張。これは言語理論でいうとフランスのポール・ロワイヤル文法あたりから出てきまして、現在のチョムスキーの生成文法の考えに如実に受け継がれている成分です。すべての言語の根底・基底にはだれにでもしゃべれる言語構造があるじゃないか、それを学ぶべきだという発想ですね。一見非常に民主的に見えてそうじゃないのが(2)の怖いところであります。
- (3) 人間というのは自らの意思で母語を捨て、よりすぐれた言語に乗り換えることができる。我々は望みさえすれば、第2外国語第3外国語をどんどん学んで新しいツールを手に入れることができるんだ、やればできるじゃないか、というイデオロギーですね。

土屋 それは、母語を捨てるということがポイントでしょ？

下澤 実はそういうものではないんだというのが田中さんの主張で、たとえばボールペンなら古くなったら捨てて新しいものを買えますが、言語はそういうツールじゃないんだということを田中さんは言いたいわけです。

土屋 これは、私たちが言葉は乗り換えられる、と考えているのが問題ですね。

下澤 それを意志が支えているというのがイデオロギーです。

土屋 うーん、なるほどね。

下澤 我々が語学教育の時に、学生に対してモチベーションはもちろん大切なんですけど、どういう風に教えたらいいのかいつも悩むんですが……

土屋 この映画の場合は、フランス語は宗主国から押し付けられた言語で、それによって自分たちの文化もひどい目に逢っているわけですけど、そこからしか出発できないというのが監督の考え方ですね。この映画に出てくるカメルーンの問題は、そのフランス語すら勉強できない、何のツールもなくなってしまうという状況をとにかく乗り越えなければならない。それをインディペンデントにやっているのは抵抗の姿なんだという、あのあたりがとても印象的なんですけど、こういう風に理論的に言われると、なるほどこうだなという感じもします。

秋枝・シュザンヌ 私は母語を二つ持っています。外国語を学ぶことによって、もう一つ他の言葉ができることによって、自分の母語がよりよくわかる、というところに戻るんです。これは、この映画にあまり大きくは出ていませんが、出ているところを見ると、*artisan*（職人）が物を作っているときの音がすごいです。それから、ある場面で屋根の上で子供が踊ってダンダンダンダンダンダン（机を叩く）とやっているところ。あれは92年のはなしですから、それからは歌の旋律はどうなったのか、ということに興味があります。映画では、そのころはカメルーンでは本が出版されていない、読まれていないとありましたが、本だけではなく、カメルーンの特徴で多様な言語があっても、

それに対する研究や意識はどうなったのかなと思いました。

土屋 この映画ではそこまではわかりませんから，それは今後私たちが勉強していくということでしょうか。だいぶ時間がたちましたので，このあたりで終わりにしましょう。生産的な話ができたとします。どうもありがとうございました。

付記：録音を整理するにあたって，文学部2年生の田中美有紀さんの協力を得ました。記して謝意を表します。

附録：下澤和義室員レジュメ

◆ デヴィッド・ハーモンによる調査（1995年）

A		B	
1. <u>バブアニューギニア</u>	847	1. <u>オーストラリア</u>	1,346
2. <u>インドネシア</u>	655	2. <u>メキシコ</u>	761
3. <u>ナイジェリア</u>	376	3. <u>ブラジル</u>	725
4. <u>インド</u>	309	4. <u>インドネシア</u>	673
5. <u>オーストラリア</u>	261	5. <u>マダガスカル</u>	537
6. <u>メキシコ</u>	230	6. <u>フィリピン</u>	437
7. <u>カメルーン</u>	201	7. <u>インド</u>	373
8. <u>ブラジル</u>	185	8. <u>ペルー</u>	332
9. <u>ザイール</u>	158	9. <u>コロンビア</u>	330
10. <u>フィリピン</u>	153	10. <u>エクアドル</u>	294
11. <u>アメリカ</u>	143	11. <u>アメリカ</u>	284
12. <u>ヴァヌアツ</u>	105	12. <u>中国</u>	256
13. <u>タンザニア</u>	101	13. <u>バブアニューギニア</u>	203
14. <u>スーダン</u>	97	14. <u>ヴェネズエラ</u>	186
15. <u>マレーシア</u>	92	15. <u>アルゼンチン</u>	168
16. <u>エチオピア</u>	90	16. <u>キューバ</u>	152
17. <u>中国</u>	77	17. <u>南アフリカ</u>	146
18. <u>ペルー</u>	75	18. <u>ザイール</u>	134
19. <u>チャド</u>	74	19. <u>スリランカ</u>	126
20. <u>ロシア</u>	71	20. <u>ニュージーランド</u>	120
21. <u>ソロモン諸島</u>	69	21. <u>タンザニア</u>	113
22. <u>ネパール</u>	68	22. <u>日本</u>	112
23. <u>コロンビア</u>	55	23. <u>カメルーン</u>	105
24. <u>コートジボアール</u>	51	24. <u>ソロモン諸島</u>	101
25. <u>カナダ</u>	47	25. <u>エチオピア</u>	88
		ソマリア	88

(下線は左右で共通する国を示す)

David Harmon, "The status of the world's languages as reported" in the Ethnologue. Southwest Journal of Linguistics 14: 1&2, 128.

*上位25か国中 か国はA,Bにランクイン → %は共通。「これが単なる偶然であるとは考えにくい」(ハーモン)

(出典 トーヴェ・ストナブ＝カンガス「言語権の存在 言語抹殺に抗して」、木村護郎編訳、三浦信孝・糟谷啓介編『言語帝国主義とは何か』所収、藤原書店、2000年、p. 295)